

歴史を解き、未来を積む

象徴的エレメントの解体と再構築による新たな公共性の創造



01. 設計背景

誰のものでもない公共

公共の在り方が見直される今、その問題は公共と個人の関係性にあると考える。

現在の公共は公を管理する行政と整備されたサービスを受用する個人という関係になっており、公共を自分事としてとらえるという意識が減りつつある。公共が誰のものでもなくなりつつあるのではないだろうか。

02. 敷地

歴史の語り部 広島陸軍被服支廠

遺構は歴史的背景を表現する象徴としての役割持っている。しかし、現在の被服支廠はその外観が地域住民に見られるだけで、建物の背負う歴史を伝えきれずにいると考える。

03. 提案

自分事として捉える公共

新しい公共とは、公共を自分事として捉え、個人が全体の変容を促す存在となるものであると考える。現在誰のものでもない被服支廠を自分事として捉え、変えていく人のための住宅群を広場と併設することを提案する。

象徴の解体と再構築

歴史を象徴する遺構を解体し、より象徴性をもたせた形で再構築しなおす。広場を使う人々の暮らしに溶け合いながら、被曝建物で過ごすことをアイデンティティへと昇華させる。

04. 手法

- STEP1. 都市のグリッドの挿入**

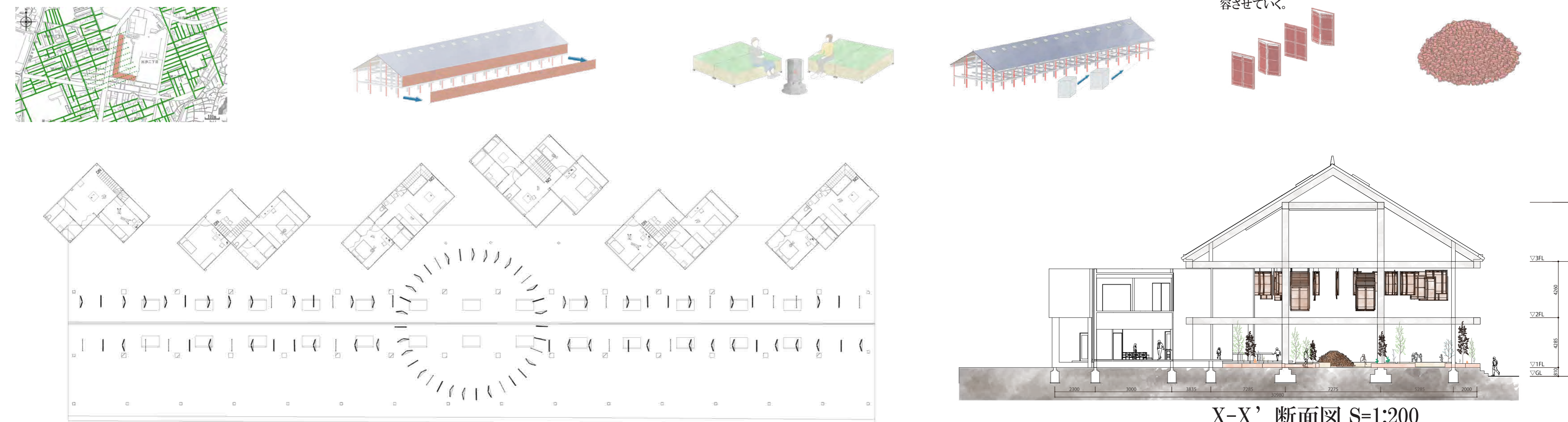
被覆師匠に対して住宅街のグリッドを挿入する。また、このグリッドを現在、被服支廠のグリッドを過去のものとす。
- STEP2. 象徴的エレメントの分解**

壁、床というエレメントを解体し躯体を残す。道路側には一部煉瓦壁を残し、新たな姿へ徐々に繋ぐ。
- STEP3. 居場所を作る**

広場利用者が各々で使い方を模索できるような移動式畳を設ける。
- STEP4. 住戸の挿入**

1で設けたグリッドに住戸を挿入していく。
- STEP5. エレメントの再構築**

分解したエレメントを再構築する。モニュメントとして再構築する。より象徴としての役割を強め、生活に溶かしていく。また、住民にレンガを配りレンガの利用を通して被覆師匠を変容させていく。



使い手が動式畳を自由に使うことで広場のかたちが変わっていく

1階平面図 S=1:300

広場の中央に積まれたレンガ住民が必要に応じて利用していくことで被服支廠の記憶を語り継いでいく

交通量の多い前面道路からよく見える2階部分の壁を残すことで親しみを残す

レンガを積んで壁を立てるなど、徐々に大きな操作が見られる。